

体験農園で収穫したての新米給食

10月23日、町内小、中学校で多目的公園・東川ゆめ公園の模範水田(約0・9畝)で栽培、収穫した新米「きたくりん」が学校給食に初登場しました。

東川小学校(大久保義邦校長、347人)のこの日のメニューは「にら入り麻婆豆腐」「チジミ」「わかめスープ」と牛乳。



この日は町内小、中学校4校でそろって模範水田で初収穫した新米「きたくりん」が登場しました。

模範水田は、町内の小、中学校の児童、生徒にうれしい東川米を食べさせたい、という思いで今年から作付けを始めました。東川小学校、東川中学校の学校田も隣接して別に併置しており、こちらは「はくちようもち」を栽培して、秋の学校収穫祭で恒例餅つき行事。約0・9畝で栽培した「きたくりん」は、今年5月、同小の5年生が田植えし、学校の授業で田んぼの生き物観察

もしました。そして10月5日、同小5年生と東川中1年生、学童児童センターに通っている児童がみんなで稲刈りしました。収穫した米は95・6俵(5千740kg)。約半年間町内の小、中学校で給食に提供します。「きたくりん」は、

発展の礎築いた家畜に感謝

10月8日、町畜産振興協議会(会長・樽井功東川町農協組合長)が主催して東川神社で家畜感謝祭を行いました。

町の礎となって貢献した家畜を慰霊するため、例年南町2丁目の忠別公園家畜感謝の碑前で開いています。今年は台風の悪天候のため戸外で開催でき



「穴を掘ってみるのが楽しい!」と英志君は土を掘り、パパは苗木を植えました。

株主の森で植樹、初の株主総会も

10月18日、東3号北6線の町有林、株主の森でひがしかわ株主の方が参加して、今年の植樹を体験しました。



果を参加者の皆さんに報告しました。「ひがしかわ株主」制度は、いたっている資金を町への株出資金と見立て、町の事業資金に活用している制度。株主総会は2008(平成20)年のスタート以来初めて、「取り組みがよく分かった」と好評だったようです。参加者はこの後、温泉入浴、陶芸、木工クラフト、木工象嵌(ぞうがん)細工の体験をコースに分かれて楽しみました。

会のひがしかわ東京会の皆さん120人が参加し、昨年植樹した隣接の林地50㎡にアオダモの苗木千100本を植えました。日中、セ氏20度と暖かな一日となり、今年の作業は順調。5年目の高橋誠さん(44)「千葉県市川市」は、二男英志君(7つ)と親子二人で植樹しました。

農業の経営の内容は変わってきたが、動物の力を借りながら生活してきた先人の労苦を忘れてはならない」とあいさつ。町を支えてくれた農耕馬や豚、鶏など家畜に感謝を込めて慰霊し、今後の農業への展望を期しました。

町立日本語学校開校、2コース14人の長期留学生

国内初の公立日本語学校として東川町立東川日本語学校(三宅良昌校長)が旧東川小学校に開校し、10月2日開校式と第1期生の入学式と短期研修の開講式を行いました。



留学生を代表してあいさつしたコウ・エキカイ(黄奕凱)

19歳から56歳までの長期留学生と短期研修生です。短期生の中には、中国から母子で来日した5歳の子も。6カ国・地域の学生たちで旧校舎に賑わいが戻りました。茶道など日本文化体験小樽、札幌、旭山動物園など道内観光もして日本を学びます。

松岡市郎町長は「大切なものを学ぶ人生の中継点として大きな役割を担いたい。お互いに信頼を築いて平和への国際貢献をしていきたい」などと入学生を激励しました。

台湾から半年コースに入学したコウ・エキカイ(黄奕凱)さんは留学生代表として登壇。日本で医師として働いていた祖父と生前に約束したというエピソードを披露し「日本に行くこと祖父と交わした約束を果たすため、台湾の会社を退職して来ました。約束を実現するためにここで勉強し日本で働き

校生の夏休み短期日本語研修講座としてスタートしました。翌年には台湾から研修生を迎え、タイ、ベトナム、インドネシア、中国、ウズベキスタンなどから来町し、これまでに16カ国約千300人が修了しました。現在、旭川福祉専門学校日本語学科でも103人が日本語を学んでいます。

横幕さん、自宅の旧母屋を練習ホールに

18区の横幕義信さん(68)が自宅敷地の旧住居母屋を室内一面の姿見鏡を備える練習用ホールに改造しました。改装したのは、旧母屋の1階8畳二間続き居間と縁側合わせて約22畳(約36平方尺)。聖月流剣舞の奥伝5段、詩吟峯流石州会準師6段の腕前で、日ごろの練習を欠かせない」と自ら練習場を造ってしまいました。妻七七代



大型の鏡を備え、踊りのけいこ場として最適な1946(昭和21)年には夫婦の結婚式もここで挙げたそうです。思い出多い建物を何とか残したい、という思いが募って始めた改造。いつの日か旧台所と食堂、2階も改造し「農家民泊体験ができるように整備もしたい」と考えています。

森林シンポジウム、ヘルスケアと健康づくりを語る

10月17日、キトウシ森林公園森林体験研修センターで、東川町、NPO(特定非営利活動)法人北海道森林療法研究会(理事長・住友和弘旭川医科大学内科学循環・呼吸医療再生フロンティア講座特任准教授)が共催して森林療法シンポジウム2015を開きました。



「厚労省2035年を見据えた保健医療政策のビジョン」、北海道経済産業局地域経済情報・サービス政策課長の小貫秀治氏が「国家戦略としてのヘルスケア産業の展望」と題して基調講演。来たるべき20年後の超少子化・超高齢社会に向けた保健医療・健康システムの再構築とヘルスケア産業の育成・発展モデルの一端を提示しました。

血糖値が下がる、ストレスが低下する、脳活性化が期待できるなどといわれる森林ウォーキングと健康づくりへの取り組みを進める取り組み方を探りました。厚生労働省から法政大学経済学部教授に転身した小黒一正氏が

昨年について森林療法を活用する健康づくり、地域づくりへの提言を考えるシンポジウムも行い、ヘルスケア産業への応用、食を組み入れた健康づくりを探りました。